

札幌市市民活動サポートセンター運営協議会 令和7年度第1回 実施概要

1. 日 時 令和7年10月23日（木）18:00～20:00

2. 会 場 札幌エルプラザ公共4施設 2階 会議室1・2

3. 出席者

- (1) 委 員：岩本 隆 委員（特定非営利活動法人 猫の手さっぽろ）
今野 佑一郎 委員（NPOのための弁護士ネットワーク）
都築 仁美 委員（さっぽろパブリックサポートネットワーク）
松田 剛史 委員（藤女子大学人間生活学部非常勤講師）
水口 紗香 委員（特定非営利活動法人 防災したっけ）
西山 謙一 委員（札幌市市民文化局市民自治推進室市民自治推進課）
高坂 美江 委員（札幌エルプラザ公共4施設館長）
- (2) 事務局：佐藤 貴明（市民活動担当課長）
上杉 直洋（札幌市市民活動サポートセンター）
盛田 絵莉香（札幌市市民活動サポートセンター）

4. 会議次第

(1) 開会

(2) 議事

- ・運営および施設利用状況について（令和6年度事業報告）
- ・令和7年度事業計画および中間報告について

(3) 意見交換

(4) 閉会

5. 議事概要

・令和6年度事業報告および令和7年度の計画・中間報告

事務局から令和6年度の報告および令和7年度事業計画、中間報告を行った。

質疑応答

（委 員） 昨年度の事業報告書の「フォローアップ事業」について、3つの講座のうち、ハラスメント講座では参加者数がとても多く、すごくニーズがあると感じるが、（法律相談のような）他事業の件数につながるような構造になる企画にしたらいいのではないか。

（事務局） 3回のうち、ハラスメント講座のみ参加費が無料で、オンラインでの参加も可能にしたことにより関心の高い方々にとっては敷居が低くなり、定員30人中29人の参加となった。当日は、講師のお話をとおして、（話を聞いて）気持ちが楽になった、ハラスメントについて考える時間をこれからつくろうと思った、という声があり、実施してよかったですと感じた事業だった。

（委 員） この会に参加して思ったのは、そもそも何がハラスメントなのか、団体を運営している側の認識がまだ固まっていない段階で受けたので、こういうこともハラスメントだったのだ、自分たちの活動でもそれが起こり得るのだ、自分たちがハラスメントをしてし

まうこととハラスメントを受けることの両方があり得て、そこは考えなければいけないのだということを認識できる場であった。認識ができるようになつた後に、言語化できること相談になると思うので、多分、こういった内容が充実すると相談につながるのかとすごく強く感じた。

(委 員) しみさぽフリーサロン「よっ友になろう！学生団体交流会」で学生団体交流は、ありそうでないため、どんな様子だったのか気になる。また、学生が企画運営に携われたら面白いなと感じた。

(事務局) さまざまな団体が、日頃打合せコーナーに集まってそれぞれ活動されているが、横のつながりが施設内であったほうがいいと感じて企画した。実施にあたり参加者数の課題は残ったが、学生団体のつながりづくりに施設としてチャレンジしていきたいと考えている。

・意見交換「市民活動情報誌のリニューアルについて」

市民に向けて、市民活動サポートセンターの機能を広く周知するとともに活動の促進を図る目的に年3回発行している情報誌について、現行の誌面の構成をあらためて考え、その役割を強化すべく具体的な企画のアイデアについて各委員と意見交換を行った。

(委 員) 「みんなのしみサポ」は、ネット上でPDFをダウンロードできるようになっていると思うのですけれども、紙媒体でも配布されていると思います。毎号5,000部を配布されているということだったので、ペーパーレス化の状況をお聞きしたい。

(事務局) ここ10年ぐらいの推移としては、基本的には5,000部を発行し続け、変動はない。ペーパーレス化についても検討しているが、紙で発行することで保存性というか、情報が書き換えられずに残ること、また、取材を受けた団体が自分たちの広報誌として周りの人に配れるという特性もあることから、紙を大事にしている。

今後の企画の内容によっては、ペーパーレス化し、発行部数を変えてもいいのかという議論はあるが、今すぐに減らしていこうという明確な見通しがあるわけではなく、一旦は紙での発行を続け、市民の皆さんに手に取ってもらいたいと考えている。

(委 員) 市民活動をはじめたばかりの頃、知りたかった情報として、どうやつたら失敗したか失敗の実例を挙げてほしい。こんな言い方でアプローチしたのだけれども、全然通じませんでしたということもあるし、思わぬところから成功したり、偶然成功したりすることもあると思う。こういうものを発表するときは、大体いいことを書くが、よくないこと、失敗したことを誌面だけでなく、例えば、言い合える場所があるとすごく勉強になるのではないかと思った。

(事務局) インターネットでも、失敗例はなかなか出てこない。活動を始めたばかりの方々は成功者の話を聞きたい方が結構多いが、最初から成功するわけではないので、(成功者が)歴史を語るようなものがあつても面白いかと思った。

- (委 員) いろいろなアイデアがあったほうがいいと思うので挙げるが、例えば、しみさぼフリーサロンなど、多様な取組を冊子に反映されることがないような気がする。宣伝や、どんなことをやったかの報告があってもいいのかと思った。
- また話が少しずれるが、しみさぼフリーサロンそのものをこの入居者団体に企画してもらうなどの試みがあっても面白いのではないかと思った。
- (事務局) フリーサロンに限らず、どの事業もSNSやホームページ、最近は1階のエントランスでニュースレターのような形でピックアップしたものをご案内、ご報告をさせていただいている。先ほどもお伝えしたように、知りたい、届いてほしいという方々に届けるため、試行錯誤しながら改善している。
- (委 員) ニュースレターについてうちの地域の自慢のNPOみたいな感じで、他地域のNPOの紹介をしてもらっても面白いのかなと思った。
- (事務局) 団体の紹介は施設とのつながりや、事業の協働のきっかけづくりにもなると思うのでNPOの紹介を含め情報収集の在り方を検討していきたい。
- (委 員) 表紙の写真を“人”にフォーカスされ、NPOの紹介も、その人がどうやってこの活動を始めたのか、その人のストーリーにフォーカスされていて、読んだら面白い内容だなと感じた。しかし、表紙が団体名からしみサポ飯までのテンプレートになっており、今回の特集は何かと見ると、「市民活動×健康」で終わってしまっているので、私にとっては、手を動かし、時間を確保してこの文字数を読むことを後押しするだけの情報がない。取材先の団体の皆さんのが面白いのか、見どころなど、その言葉に共感した人にページを開いてもらえるよう、表紙に情報がもう少しあってもいいのかもしれないと思った。例えば、市民活動Q&Aで、「人手が足りない、どうする今年の総会」など、刺さる人がいると思うし、それに答えてくれる相談員の方がいたらそこの相談件数が増えると思う。
- (事務局) 団体のお名前やお知らせなどが表紙で分かるようにはしているが、レイアウトや文字の見せ方、写真は検討していきたい。
- (委 員) 例えば、今申し込み中のイベントなどでホームページとともに連携できるといいなと思った。外部のQRコードを載せても、そこを見に行くかと言わいたらあんまりなのかなと考え、むしろ、こういう活動をやっています、しみサポでこんなイベントがありますとイベントページをつくって載せ、今申し込み中のイベントや来月のイベントに読んだ人がアクセスできる動線ができたら、興味を持って参加するまでにたどり着くかなという気がする。
- (事務局) ホームページで案内はしているが、見ていない方に向けて、まだ届いていないところに情報誌のページを活用することは検討したいと思う。
- (委 員) 市民活動を始めるきっかけは、人にフォーカスするのもいいと思うが、例えば民間の企業や大学など、組織側と関わることはできないかなと思った。NPOとNPOがつながりNPOに関心がある人同士が関わっていくというマッチングにも意味がある。でも、何かやっているけれども、自分とは縁遠いな、興味はあるけれども、よく分からぬとい

うNPO界隈の外の人との接点をどう持つかきっかけになるのかなとも思った。

民間の企業と接点を持てるかは分からぬが、今お話を出ていた学校など、教育機関と関わり、その号だけでも学校に置いてみると、あるいは、企業の地域貢献の分野や町内会などに関わっている人に話を聞き、そこに置いてみようみたいな形で手に取る場を広げていくことも企画と連動させていいのではないかなと思った。

ご飯屋の企画もすごくいいと思っている。そして、お店に置くための特集をしてしまえばいいのではないかと思った。現行のQ&Aぐらいの枠を取り、あなた（お店）としみサポみたいにコーナーを一つ作ってしまえばいいと思う。地域でやっている社会貢献、若者支援に何もしていない飲食店は多分ないと思う。子ども食堂に関わっている、食材の提供している、実は月に1回のごみ拾いをしているなどをコラムみたいにしてしみサポ飯の人を取り込めないだろうか。

（事務局） 情報誌をつくったのでよかったです、お手に取ってください、とお渡ししているが、渡す人たちが増えていくよう、協働していくことはやはり必要なのだと改めて感じた。

（委 員） 事業実施報告を見て、NPOの広報を支援する取組が本当に多いんだなと感じた。例えば「みんなのしみサポ」にNPOの“10周年記念”のような告知ページがあると、団体自身が配ってくれるし、団体にホームページがなくても『ここに載っている』と共有できるので、支援内容と紙面がうまく連動すると思った。また、人を介して『ここにも告知があります』と手渡されたとき、受け取った人がほかの団体の活動も知るきっかけになり、市民活動全体を盛り上げる機動力になるのではないかと感じる。さらに、ほかの事業と連携したページづくりを検討していただけると、とてもありがたい。

（事務局） NPOの皆さんのが活動を取材したり、広報物を一緒につくる支援は行っていますが、活動内容を深く掘り下げる紹介まではまだできていない。先ほどのご意見を聞き、団体同士の刺激やモチベーションにつながるような情報誌の必要性を改めて感じた。新しく登録された団体にヒアリングすると、広報に関する困りごとが多く、ホームページやSNSの使い方が分からぬという声もある。そのため、伴走支援として基礎から学べる支援を実施している。ただ、紙媒体は「温かみがあつて励みになる」とおっしゃる団体も多く、紙の需要は今も高いと感じている。「みんなのしみサポ」については、より多くの団体が利用できる形を検討していきたいと思う。

（事務局） 誌面の巻頭部分に目を引くキャッチコピーが不足していることや目次の見直しが必要であり、自分に関係のある団体でなければ手に取りにくい紙面であったと認識した。過去の誌面では入居団体の紹介コーナーやイベント情報・実施報告が掲載されていたが、現在は誌面構成が変化しており改編の余地があると認識している。店長コラムなど掲載料なしで団体や店舗の情報を掲載できる仕組みを活用すれば、多くの団体や店舗が協力してくれる可能性があり、配布先も含めマーケティング面で検討する価値がある。「みんなの」の名称に込めた意味を生かすため、市民活動に関わる人々が誌面に反映される構成にすることが重要であり、今後は誌面の届け方や読者像を意識しながら改善・改編を進めていきたい。

- (委 員) しみサポのホームページで、登録団体を一覧で確認できるか知りたい。
- (事務局) 登録団体の一覧は確認可能だが、トップページからは直接見られず「お問い合わせ」から「活動団体」と進む必要がある。ユーザー自身で検索や確認はできる。
- (委 員) 「みんなのしみサポ」は写真も多く団体紹介が端的で見やすいが、現状では過去の記事や掲載ページを確認するにはPDFを見る必要があり活用しづらいため、登録団体が自分の団体をホームページで検索した際に、過去記事すべてでなくとも今後掲載するものを検索しやすく整理できると便利である。
- (事務局) ホームページを持たない団体も掲載でき、団体情報にホームページ URL を載せてイベント情報欄に記事アーカイブをリンクすれば、団体にとって広報になる可能性があるが、実証できるかは不明である。また、このページを見ることで団体や活動内容が分かりやすくなる。
- (委 員) 誌面は分かりやすくデザインも良いため、活用の幅を広げるオプションをしみサポ側で提供するとよい。ホームページ改修だけでなく、使い方や知らせ方も工夫できるのではないか。
- (事務局) 過去掲載団体から、より多くの人に届けたいとして情報誌の追加配布を求められることがあるが、印刷部数に限りがある。今後はデジタル化も含め、より多くの人に届ける方法を検討する余地がある。オプション提供は可能であれば検討したい。
- (委 員) 他市町村にも市民活動センターのような施設はあるが、札幌市との連携や情報交換の機会は少ない。近隣地域から始めて、札幌市の情報を広げたり、逆に他地域の人が札幌の市民活動に関心を持てるような接点づくりがあるとよい。
- (事務局) 北海道NPOサポートセンターとの伝えるコツセミナーで、札幌会場を中心にサテライトとして函館・旭川と接続し、市民活動センター同士の情報共有や事業紹介の機会を設けている。また、全国の中間支援施設と連携した寄稿も行っており、いきなり多数の施設とではなく、少しずつつながりを広げることで幅を広げていきたい。
- (委 員) 誌面掲載は行わなくても、他地域の人が札幌の市民活動に関心を持てるような方法を模索できないかという提案でした。
- (事務局) オンラインで参加している委員からSNS運用の目的達成状況と分析状況について質問があり、現状について説明すると、フェイスブックはフォロワー885人で主に45～54歳の女性が多く、65歳以上は男性が多めで、10～20代は少ない状況であり、インスタグラムのフォロワー数は少なめだが女性が73.8%を占め、年齢層はフェイスブック同様45～54歳がピークである。この結果をもとに、SNSがどの層に届いているかを整理し、情報発信内容を精査していく必要があるが、現時点では具体的な改善や検証には至っておらず、今後の検証を予定している。

(事務局) 情報誌の内容や在り方を見直し、センターだけでなく多様な関係者を巻き込んで広報力を高める仕組みを検討しながら、今後リニューアルを進めたい。

以上